釣れ釣れなるままに

１９９９年思い出の釣行記 PART.　５

ノルマンディー上陸作戦

鹿島釣狂

釣遊会第４回大会

☆開 催 日　平成１１年７月１１日

☆開催場所　歌別川～岬漁港

☆入釣場所　東歌別

☆潮　　満潮　２３：５７　１３３cm

　　干潮　０６：５８　１５cm

　　満潮　１５：０８　１１７cm

☆釣　　果　カジカ　２７６　mm　２

　　アブラコ　３７１　mm　１

　　ハゴトコ　２

　　重量　２０１　０ｇ

　　合計　８４８　点

　　成績　８　位

　　累計点　４３点　９位（10，19，6，8）

　　３回計　２４点　６位

海水温が低いときは浅場を釣れ

６月の太平洋は海水が冷たいため、魚は比較的海水が温まりやすい浅場の岸沿いや湾洞になっているところに集まる。東歌別方面は浅いため６月の釣り場である。７月になると魚は温かい海を嫌って深みに落ちて行くので、襟裏岬方面がよい。今年の７月はどうであろう。まだ海水温は低く、昆布の成長が極端に悪いということである。６月に釣られてしまって残っている魚が少なくなっていると思われるが、勝手知ったる（と言っても 3 回の入釣であるが）東歌別で廣田氏、荻野氏とともにバスを降りる。

新聞紙上で「釣り人のマナーが悪く、東歌別の漁業関係者が釣り人を締め出す方向で検討中」と言うような記事が載っていた。不安な気持ちで第１投を舟上げ場前の溝に打ち込む。ほどなくカジカのチビ２とチビアカハラ１、ハゴトコ２で２魚種５匹がそろった。

ノルマンディ上陸シーン

そろそろ干潮にかかる４時頃、狙いの岩に上がるために後片付けをし、防潮堤から下りて潮の様子をうかがう。潮待ちで躊躇したために他の会員に入られた前回の苦い教訓もあり、一部腰ぐらいの海水を漕いで渡った。ここは沖の岩が波を消してくれ、浅いプール状態になっているために大変渡りやすいが、初めて渡った時は、膝より浅い場所にもかかわらず、岩についた海草の下が深く抉れているのではないかとの疑念から、一歩一歩、三脚で足元の岩を探りながらの前進であった。

大会終了後に聞いたことである。エリモ岬第７降り口に降りたＳ氏とＯ氏は十数人の潮

待ちの中、先陣を切って沖の離れ岩に向かった。先をこされまいとする釣り人が同時に渡り始め、離れ小島の一等地目指して前進する。潮流の速い岬先端を胸まで海水に浸かりながらの行軍である。戦争映画での上陸の On e シーンを思い浮かべさせられる。腕から突き上げられた機関銃が竿となり、背中の軍用ザックは、重いコマセとイカゴロやカツオで満杯のバッカンに代わっている。

彼らは胸まで浸かるのはわずか２メートルぐらいの幅と言うが、私には到底まねをすることができるものではない。かわいい息子も娘もいる。最愛（差し障りがあるのでここではそのように表現しておく）の妻もいる。人生にもまだ少し未練がある。しかし、慣れを考えるとどうであろうか。１０㎝程の海水も渡れなかった私が、今では腰まで浸かって渡るような状況である。潮が満ち、足元を海水で洗うようになってもなお、立ち込みの状態で粘っている有り様である。大物を求めて近い将来・・・。

先陣を切ったＳ氏は離れ小島の一等地で本日の身長優勝を果たしたアブラコ５０㎝強を引き抜いた。後陣を拝したＯ氏は３４．５㎝止まりのアブラコであった。しかもＯ氏は海中を渡る途中で三脚を海水に流されている。後で三脚が戻ってきたとのことではあるがどのようにして戻ってきたのだろう？　またその間、どのように竿を置いたのだろう。この次に会ったときにはぜひ開いてみたい。

大カジカが花咲ガニに変身

私は、無事に渡った岩で早速大物アブラコを夢見て沖の岩目がけ遠投を繰り返す。しかし、竿を揺らすのは小さなハゴトコのアタリばかりである。あの大きくグン、グン、グーンと締め込むアブラコ独特のアタリがない。もちろんガタガタッと一気に竿をなぎ倒す大カジカのアタリもない。あるのはチョンチョン、クンクンのハゴトコばかりである。

場所の移動をと考えて荷物を持たずに辺りの様子を伺いに出掛ける。潮がすっかりひいた今では、潮が引く前の深い海の底をどこまでも自由に歩き回れる状態にある。船着き場の左の方で竿を振っている荻野氏、廣田氏にも開いてみるがあまり芳しくない。荻野氏は、暗いうちに嫁さんをとイカゴロ５０杯を使いやっと３０㎝程のアカハラ１匹と言うことである。やはり大物は温かい東歌別の海を避け、深間に去ってしまったのか。

前年度、佐々木秀美氏がアブラコの大物を引き抜いた岩が空いている。場所の移動の為に元の場所に戻り竿を上げるとやはりハゴトコが２本ついている。何げなくもう１本の竿に手をやり竿を煽るとググッと魚の手ごたえがある。途中の根に 1 回潜られたが難無く上がってきた。ホンダワラと昆布の中に３７㎝程のアブラコがついていた。いよいよ魚がコマセの匂いにつられて寄ってきたのか？　３本目に期待して竿を煽る。今度も大きな手ごたえがある。ただ重いだけで頭を振る様子がないところを見るとカジカの大ものか？　上がってきたのはやはり大きなホンダワラと昆布の魂である。塊の中にいるはずの大カジカの代わりには大きな花咲ガニがついていた。

新調したリールの威力

今回の大会からリールを新調した。いつもお世話になっているカナダ屋でバーゲンがあり、指を咥えて眺めるばかりだったリールに手頃な値段がついていた。思い切ってダイワのトーナメントサーフＧ３５Ｔを２台購入した。道糸にはダイワのサーフセンサー２号を巻いてもらった。３台いっぺんにとの願いはあるがあいにく手持ち（家に帰ってもないのだが）がない。替えスプールがついているのだが、それに糸を巻いてもらう金銭的余裕もなかった。

これが大変使いよい。先程のホンダワラ＋昆布＋アブラコもホンダワラ＋昆布＋大カジカもどき花咲ガニもいとも簡単に上がってくる。これまで使用していたリールだとあれだけの重みがついたら道糸を手で手繰り寄せるしかない。少し大物の魚がついた時などは、ガリガリと金切り声をあげ、何度も何度も根に潜られて昆布との格闘になっていたのだが、すぐに魚が浮き取り込みやすい。

魚が少し寄ってきたのを確信し、移動をやめてもう少し粘ってみる。しかし相変わらずである。移動するはずだった岩場にも他の釣り人が入っている。あきらめて時間締め切りまでハゴトコと遊ぶこととなった。

浅い海にはタコが似合う

東歌別の海は本当に浅い。ハゴトコと遊んでいると海水に入ってタコを取っている漁師の姿が見える。鉄製のカギのついた長い棒を岩穴の中に入れて操っている。まもなく、５歳ぐらいの子どもほどのタコを引き寄せた。私が投げている近くに来たので竿をどけるかと聞いてもその必要はないという。道糸をどけながらやはり長い棒を操っている。今度はその漁師の体ぐらいはあろうかと思われる大ダコを手繰り寄せた。

私のすぐ前まで持ってきて「どうだすごいだろう」と言わんばかりの仕草で高々とタコを持ち上げた。赤銅色ににぶく光る彼の腕にはその大ダコが大変よく似合う。

また、「お前の投げているところはすんごく浅いぞ。もう少し沖さ投げれ！」と宣う。これでも精一杯投げているのだが・・・。新調したばかりの縒り糸では２５ｍごとに色が変わっており、４色が出て５色目になっているので、自分ながら飛ばしているなと思っていたのにこの言いようだ。さらに、「俺が仕掛けを持って行って深いところに投げてやっか」と宣う。荻野氏がやってきて、私よりもう少し下がった出岬でやっていたものだから、さらに漁師の戯れ言が続く。「お前の投げているところ、岩の上だぞ～」

浅い海には赤胴色の腕をもったタコがよく似合う。

大会成績

優勝は坂岸に入って１３３０点を出した吉井氏でカジカとアブラコの大物をゴロゴロと出した。準優勝は１１７３点の佐々木（秀）氏で襟裳岬の離れ小島に渡って５０．５㎝のアブラコを引き抜いた。３位は１０８３点の島氏で彼の得意の場所となってきた沖ノ島で

の釣果である。私は８４８点（アブ 371 ㎜＋カジ 276 ㎜＋重量 2010g）で７位入賞となる。
　９月の第５回大会は十勝の海岸にて実施される予定である。オンコの沢で大物と格闘している自分の夢を見ながら帰りのバスの人となった。

優　勝　吉　井　　博　１３３０点　坂岸
準優勝　佐々木　秀　美　１１７３点　第７
３　位　島　　強　二　１０８３点　沖の島
身　長　佐々木　秀　美　５０．４㎝　アブラコ